

## ワンポイント経済学：合理性と不合理性（1）

佐々木 宏夫（2007年12月）

「月刊」というにはノロノロした歩みですが、月刊『会計道場』の第2号をお届けします。先生方や学生諸氏にも寄稿をお願いしたいと思いますが、人に文章を書いてもらうようお願いする前に、まずは隗より始めよというわけで、「ワンポイント経済学」と称する連載を始めさせて頂こうと思います。

これから何回かにわたって、経済学の勉強をしているとしょっちゅう耳にする「合理性」ということについてお話ししたいと思います。

まず、ゲーム理論で有名な2つの実験をご紹介します。友達同士でも出来る簡単な実験ですので、興味を持たれた方はやってみてください。



**【実験1】**被験者（何人でも良いですが、少なくとも10人はいた方がいいでしょう）を集めて、0から100までの好きな数を紙に書いてもらいます。その紙を集めて平均値を計算します。その平均値を2/3倍してください。それに一番近い数を書いた人が、賞金を全額受け取ることが出来ます。

**【実験2】**被験者を2人1組にします。便宜上、1人をA、もう1人をBと呼ぶことにします。まず、実験の主催者がこの2人に100円をあげます（お金があればもっとたくさんあげてもかまいません）。Aは紙に0～100までの数（その数をxとします）を書いて、黙ってBに渡します。Bはそれを読んでから紙に、“YES”か“NO”かのいずれかを記入します。もし“YES”と書かれていたら、最初にもらった100円のうちx円をAがもらい、残りの100 - x（円）をBがもらいます。もし“NO”と書かれていたら、100円は実験の主催者に召し上げられてしまい、2人は1円ももらうことができません。



私は、これまで何度か、授業などでこれらの実験をやったことがありますし、私だけでなく世界中いたる所で行われている実験です。ところが興味深いことに、どこでどんな人を対象に実験しても、似たり寄ったりの結果が出るのです。（かつてある監査法人にCPEの講義に行ったとき、数十人の公認会計士の皆さんを被験者にして【実験2】をやったことがあります、そのときも「世界標準」の結果が出ました）。

その「似たり寄ったり」の結果をお伝えしておきますと、【実験1】でほとんどの勝者は、25から35の間ぐらいの数を書きます。また、【実験2】では、たいていの人が50前後の数を書いて相手に渡し、相手は“YES”と書くケースがほとんどです。この2つの実験の解説（タネ明かし）は次回に行うことにしますが、今述べた実験結果がどういう意味を持っているのかを少し考えてみてください。実は両方の実験結果は、いずれもが人間の「合理性」について、私たちに考えるきっかけを与えてくれるものなのです。（続く）



# SAP コンサルタント認定試験に合格して

早稲田大学大学院会計研究科2年  
石森 佳美

私にとって、SAP ジャパン寄附講座の受講は一つのチャレンジでした。会計研究科入学当初はこのような IT 関連の科目を受講するとは考えもしませんでしたし、私自身は IT に長けているわけでもありません。しかし大学院生活を過ごす中で、「会計+」として、会計専門家として求められる IT に関する知識を習得したいと考えるようになり、PC のオペレーションについていけるかなどの不安はありましたが、SAP ジャパン寄附講座の受講を決めました。そして今秋、私は SAP コンサルタント認定試験を受験し、見事(?)合格することができました。

認定試験として私が行ったことは、前期の通常授業の受講とその復習、そして夏期集中講義の受講です。認定試験の試験範囲の大部分は、通常授業の内容です。そこで私は、通常授業は毎回欠かさず出席し、復習の際には授業内で使用した教科書や資料を読み、SAP ジャパンから頂いた補助教材を使いました。



また、夏期集中講義では、より認定試験に直結した内容として、通常授業では扱わなかった認定試験頻出論点についてカバーしました。実際に受講してみると、SAP ジャパンの講師の皆様から親切丁寧な指導を受けることができ、開講当初に感じていたオペレーション面での不安は直ぐに解消されました。また、認定試験対策という観点から今になって考えてみると、PC のオペレーションを習得していくことも大事ですが、そのオペレーションの必要性を考えることも重要ではないかと思います。

つまり、そのオペレーションが企業活動のどのプロセスに関わるものなのかを常に念頭に置いたうえで、「このオペレーションが無かったなら、企業の内部統制にどんな影響が出るだろうか?」と、そのリスクを想像してみるのです。そうすることで、SAP ERP システムについてだけでなく、内部統制監査そのものの理解にも繋がるのではないのでしょうか。

私は SAP ジャパン寄附講座をきっかけとして、どのように IT を利用して効果的かつ効率的に監査を行っていくのかに興味を持ち、現在は「システム監査」を受講しています。私がこのように認定試験に合格し、さらに「システム監査」に興味を持つようになったのは、SAP ジャパンの皆様や会計研究科の諸先生方の御指導・御尽力があったからです。この場をお借りしてお礼申し上げます。ありがとうございました。

卒業まで残り僅かとなりましたが、悔いのない学生生活を送れるよう、今後も飽くなき探究心を持ち勉学に励んでいきたいと思いを。



# ふり返れば 遙か遠く故郷が見える

SAP ジャパン エデュケーション事業本部 志村 政一

## 「え、体育学部卒業なんですか！」

やはり、異色でしょうか。白状すると、私は体育学部(東京教育大学 現 筑波大学)出身なのです。卒業論文は「水泳時における血圧の変動パターン」でした。私自身はあまり異色の存在とは思っていません。と言うのは、昔から IT の世界は「体力が全てだ(これは、体育系の独壇場です)」とか「IT システムは芸術だ(とすると芸大出身が向いていますね。実際、私の最初の IT の先生は芸大の彫刻科出身でした)」などと言われてきました。これは、私の経験に裏付けられた実感ですし、この説に異を唱える人に出会ったこともありません。(本当ですよ！)



## 「スキーでの骨折が、IT への道しるべ」

教員採用試験を控えた 3 年生の時、恒例の 4 年生追い出し春スキーに参加して骨折してしまいました。このことがなければ、たぶん高校の保健体育教師を職業に選んだと思います。

教員採用試験を諦め、IT 系の仕事を選んだ理由は、卒論のデータ処理にコンピュータを(少しだけ)利用して興味をもったことと、当時(40 年ほど前)企業がコンピュータ導入を始めたばかりで、IT の世界が夢のように語られていた時代背景があります。その頃の「フーテンの寅さん」の中で寅次郎が「おれの妹はキーパンチャーやっただぞ……」と得意げに話している場面がありました。その頃は IT 関連であればどのような職種であれ、鼻が高い時代だったのです。「今は昔」ですね。



会社に勤めて最初に手がけた仕事は、IBM 社のオペレーティングシステムを解析し、日の丸コンピュータ(古い言葉です)に移植する仕事でした。アメリカの IT 技術に「追いつけ、追い越せ」と国を挙げて頑張っていた時代でした。

## 「会社の上場を機に会計システムの世界に興味をもつ」

就職した会社が運良く一部上場するまでに育ち、会計システムの再構築プロジェクトを率いることになりました。その時、初めて借方 / 貸方、管理会計、監査などについて勉強しました。

幸い、会社の経理責任者やコンサルに入った監査法人の方たちのマインドが高く、会計原則を説明するときも「何故そうなっているか」を必ず解説してくれたので、無味乾燥と思っていた会計の世界が、実は大変に人間的で、面白い世界であることがわかり、すっかり夢中になっていた時期がありました。

また、このとき「管理会計は会社経営そのもの」という事や、管理とは「PDCA」の繰返しであるとか、網羅性とは「漏れなく、ダブリ無く」と言う意味だとか、会計に係る様々な基本事項を習得しました。



## 「監査は罪人をつくらないためにある？」

再構築した会計システムには監査証跡を残す仕掛けや、財務会計側と管理会計側の整合性をとるための「統制勘定」メカニズムなど、今で言う IT 統制を過剰なほど組み込みました。その過程で「監査」について会計士と議論した折、私が「監査と言う言葉は、間違いや虚偽を発見して罰すると言う暗いイメージが強く、好きになれませんね」といったところ「志村さん、それは違います。監査は人に過ちを起させないためにあるのです。」

普段は企業に貢献し、家族の生活を支える有能かつ善良な社員が、ちょっとした心隙から悪魔に付入られ、企業ばかりか家族まで不幸にするようなことが起きないように監査があるのです」と言う話を聞きました。当時、若かった私はこの話に痛く感銘を受け、システム監査に関する勉強をして「ISACA (Information Systems Audit and Control Association) のCISA (Certified Information System Auditor)」と「当時、通産省が認定していたシステム監査人」資格を取得した次第です。



### 「Lesson Learned: 変化への適応が生き残りの鍵」

大学卒業以来、実に37年間もの間IT業界に身をおいてきたこととなります。これまでの道のりを振り返ると、かならず美空ひばりさんの「ふり返れば 遥か遠く 故郷が見える。でこぼこ道や 曲がりくねった道。地図さえない～ それもまた人生 ああ～ 川の流れのように ゆるやかにいくつも 時代は過ぎて…」がメロディー付きで頭の中に流れてきます。企業においては「地図さえない～」は許されませんし、ITの変化は決して「川の流れのようにゆるやか」なものではないのですが、この歌は私の心象風景にぴったりなのでしょう。

この30数年間、ITの変化は俗にDog Year(犬は人間より6倍早く年をとることから、IT技術が急速に変化することの喩として使う言葉)と言われるスピードで変化し続け、いまや世の中のほとんどの仕組みはIT技術の利用なしに維持運用できない時代になっています。会計研究科の皆さんはこれから社会にでて、会計/経営/コンサルなど様々な分野で活躍することになりますが、佐々木先生、鈴木先生が常々仰るように「どの分野に進んだとしても、ITは分からないでは済まされない」時代なのです。

経営環境の変化だけでなく「IT技術の変化」を常に把握し、その変化が自分の領域にどのような影響を与えるか評価し、知識体系を再構築し続けることが一流の企業人として生き残る上での最低条件と言っても過言でないと思います。

SAP ジャパン寄附講座が、このような環境の中で皆様のお役にたつことを切に願っています。

### 2007年度 早稲田大学大学院会計研究科 研究科暦

冬季休業期間	2007年12月23日(日)～2008年1月7日(月)
秋学期補講期間	2008年1月24日(木)～1月26日(土)
秋学期定期試験期間	1月28日(月)～2月2日(土) [予備日2月4日(月)]
秋学期授業終了	2月4日(月)
春季休業期間	2月5日(火)～3月31日(月)
修了対象者成績発表	3月3日(月)
秋学期成績発表(在学生)	3月19日(水)
大学院学位授与式	3月25日(火)

補講については、通常の授業曜日・時限と異なる時程で行われる場合があります。補講科目・日程については、掲示・Waseda-net ポータルでご確認ください。